



Title	他人が「他者」になるとき：移民研究と「他者」再考
Author(s)	田沼, 幸子
Citation	年報人間科学. 1999, 20-1, p. 229-245
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/10008">https://doi.org/10.18910/10008</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 他人が「他者」になるとき・移民研究と「他者」再考

田沼 幸子

### 〈要旨〉

近年の人類学批判は「他者」概念を政治倫理的に否定し、分析概念として退けた。被調査者の他民族を「他者」と表象することは「認識論的アパルトヘイト」と非難される相対主義に基づき彼らを不利な立場に押し止めることを正当化するとされた。この考えを押し進めると「他者性」は構築されたものであり解消できるはずであるという近年、影響力を増す人類学の見方になる。だが、この考え方も、結局現実の他者を表したものではない

以前の「我々の現実と全く異なるもの」という意味ではない。ある側面においてあらかじめ予測できないことや理解できないことが「他者性」であり、それが境界となつて「彼ら」と「われわれ」を想像させる。境界は視点によつて別のものが重層的に現れる（一度にみえるのは一つである）が、一つの境界も可変的である。

### キーワード

他人、「他者」、「移民」、境界、名の有無

という批判が出ている。他者の予測不可能な側面をあらかじめ捨象していふためだ。しかし、代わりに提案された「他者」をめぐる議論は、現実の人間と、予測不可能な性質双方に同じ other を当ててゐるため、具体的に理解しにくい。ここでは「他人」という語を導入し、彼らの見解を私の言葉で整理し、人類学的事例に使用可能にする。「他者」とは「他者性」＝境界によつて想像される抽象化された「他人」の集合である。境界論は今まで既に名付けられた民族・エスニシティの説明に使われることが多かつたが、ここでは名付けのない境界も他者境界として考える。この他者性とは、

## 1. はじめに

「あの人たちとは違う」

一番引っかかったのは、在日ビルマ<sup>(1)</sup>人のこの言葉だった。1967年8月から一ヶ月間、私は東京のビルマ人宅に住み込み、夜はミヤンマーレストランで手伝いながら修士論文のためのフィールドワークをした。ビルマに関しては全くの初心者である私に、彼らは喜んで自國の文化や歴史、未来の抱負を語ってくれた。在日ビルマ人はおよそ一万人いるといわれている。そのほとんどは本国ではエリート階層に属す、同年代の人口のうち3%足らずの大卒業者である。にも関わらず、その多くが飲食店のアルバイトを一日中していた。1988年の民主化運動とその武力弾圧の影響だ。政府の逮捕を逃れた者もいれば、大学の閉鎖や職の不足で仕事を求めてきた者もいる。いずれにせよ、独立後に東南アジアで最も豊かだった国から最貧困へと転落したことが国外流出の背景にあり、その根源と見なされる政府への彼らの不満は強い。東京のビルマ人は初対面の私にさえ「これ（他の人に）いつちやダメよ」と言って「政府」「軍人（軍事政権）への批判を口にする。「私たちビルマ人は勤勉で分け隔てなく親切で、皆が政府に反抗意識を持っている」：それが彼らの一般的な自己表象だった。ところがしばらくして、具体的に他の在日ビルマ人が話題にあげられたときには、しばしば一転して打ち消しの言葉が返ってくることに気付いた。

「あの人たちとは違う」  
「私たちとは違う」

「違う」の理由には分かりやすいものもある。例えば出稼ぎが留学か、反政府か現状黙認か、日本語ができるか否か、など。だが、そういうた理由はある人たちとの間では「違う」の理由になつても別の人たちとの間ではそうならない時もある。

「違う」わけを客観的な属性をもとにあげていっても、結局一貫したものはない。

「ビルマ人は、気に入った人たちとしか付き合わないから」  
ビルマ人との付き合いの長い日本人がよくいう言葉だ。これはこれで説得力が無いわけではない。ビルマ人自身、いろいろな集まりでどんな人を呼ぶのかと聞くと「気が合う」ことを理由にあげる<sup>(2)</sup>ところが「気が合う」人たちとの間にも、「あの人とは違う」の線引きがなされることがある。

初めの単一な「われわれビルマ人」の語りから想像できない線引きの多さや、きつぱりした線引きの表現の仕方は彼らに独特な傾向であると言える<sup>(3)</sup>。このような線引きはビルマ人の特性のようにさえ思えてくる。が、よく考へてみると実は線引きのやり方に様々な特徴があるのであって、線引き 자체は誰でもしている。つまり在日ビルマ人の言う「あの人たちとは違う」という線引きは、ビルマ人に限らず誰もがしている「他者」としての誰かとの線引き、と考えた方がいいのではないか。そう気付いたのはフィールドワークを終えて一年が経つてからだ。「他者」との線引き、という考え方になか

なか思い至らなかつたのは、「他者」という言葉の多義性と、この概念を巡る近年の人類学批判の影響が大きい。人間学における「他者」はかつて「異文化」の「被調査者」のことを指していた。「他者」は遠くのへわれわれの世界とはかけ離れた者／達であり、彼らの文化はわれわれの常識を覆すものと考えられていた。ところが近年、人

類学の「他者」は、実は彼らの歴史や政治経済的な背景を看過することによって構築されているという批判がなされた。類似性の捨象によって、「他者」がつくられたというわけだ。「他者構築」批判の影響力は大きく、その後の人類学の研究対象とテーマは、例えは「移民」など類似性を中心とするものになつた。被調査者について語られる他者性を、積極的に脱構築することを提唱する人類学者もいる。さらに人類学は支配的な構造に苦しむ被調査者が、解放に向かう語りを支持すべきだという意見もある。<sup>(4)</sup>

だが、類似性によって「他者」はいなくはならないことを、先述した在日ビルマ人の語りは示している。ビルマ人「内部」はもちろん、日本人と在日ビルマ人との間にも強い親近性や類似性がある。だがある面においては互いを「他者」と見なしていると言える。事例から分かつたのは、オリエンタリズム的な「他者」構築への批判は正当であるが、類似性や親近感があつてもなお「他者」が現れる状況があるということだ。つまり「他者」概念が批判され、異民族間の差異が縮小したとしても、「他者」に関する語りは日常に存在する。この状況を、どうすれば、詳細な民族誌的事実の追求ばかりに陥つたり、テクストにとどまつたりせずに、とらえることができる

だろうか。

一つの答えとして本稿で主張したいのが、「他者」を予測から逃れるものとしてとらえる考え方である。一見抽象的な「他者」概念を、具体的な事象—特に移民研究を踏まえて再定義すれば、有効な分析概念として使用できることを提議する。この論考ではまず、近年の人類学における「他者」の否定がどんな根拠でなされるのかを検討し、これらの根拠が「他者」の否定にはならないことを確認する。次に、従来の人類学における「他者」概念とは異なる、予測を逃れるものとしての「他者」とは何かを示し、二つの「他者」の相違点と、後者のメリット・デメリットについて考察する。メリットは、既存の概念や枠組みに囚われない可能性を開くことであり、デメリットは人類学の具体的な事象を扱うには、定義が漠然としていることである。そこでこの「他者」定義を移民研究における「他者」の使用と照らし合わせ、より具体的に、いかなる時に人が「他者」として現れるのかを提示する。このとき問題なのは「他者」という語があまりに様々な対象に用いられていることである。「他者」を巡る議論の混乱の大半は、「他者」という語の多義性に起因するといつてもよい。本稿では「他者」を分析概念として用いるために「他人」という通俗的な単語を導入して議論の整理をしたい。

## 2. 他者性の脱構築の傾向と対策

### A. コミュニケーションは「他者性」を否定するか

「他者」の「他者性」を疑う人々として反一相対主義者があげられる<sup>(5)</sup>。異文化に「理解できない」とあるという見解を、彼らは「認識論的アパルトヘイト<sup>(6)</sup>」と批判する。そして親近性・類似性の指摘によって「他者」の「他者性」を疑問視する。スペルベル<sup>(7)</sup>は反語的に問い合わせる。「もし他の文化に住む人々が異なる認識世界(cognizable worlds)に住むといふなら、どうやって彼らを知る」とが出来るだろう? ゲルナーは過去においてすべての民族誌家は異なる人々についての報告を必ずしてきたことを「人類学的事実<sup>(8)</sup>」であると断言する。彼に同意してスペイロはこう結論する。

つまり、外国人(alien peoples)の「人間の経験」すべてが工スノグラファーにとって理解可能ならば、次のようにしか考えられない。文化・人間の気質や心性は、多様ではあっても、それほどひどく多様ではないといふことだ(1992:20)<sup>(9)</sup>。

そして以下の二つの立場を一度に取ることは出来ないとする。

要約して言えば、認識論的相対主義者達は、両方を取ることは

できない。一方で文化(cultures)は通約不可能であると言ひながら、(彼ら自身を含む)民族誌家は外国人の文化と心性を理解できる、と主張するんじゃないのだ(1992:21)。

だが実際は、両者は同時に成立してもおかしくないはずだ。スペイロが上記の結論を出す際、暗黙に前提していることが誤りを含んでいるため、両方の成立を否定する」とになってしまつてある。

スペイロの

① でも実際はコミュニケーション可能で、理解できる(ので他者ではない)

という反論は、相対主義者が

② 他者(?)では「外国人」と同義との差異は明白で、理解不可能である

と考えてみると、と想定する」とによって成り立つ。しかも、この両者の議論は、相対主義者と反一相対主義者双方が

③ 他者(?)では「外国人」と同義)は全ての側面において他なるものである。

とこう前提を受け入れてはないと成り立たない。だが大前提となる③自体に間違いがある。()では議論の便宜上「他者」を「外国人」としておこう。外国人と交流するとき、われわれはいくつかの差異に驚くとともに、類似性にも驚く。外国人だから違うだろう、と想像していたにも関わらず類似性があるため驚き、人間だから同じだらう、と考えていたために差異に驚くのだ。類似性のある点から無

難なコミュニケーションが始まり、「失敗」を通じて外国人とのコミュニケーションは、より誤解の少ない状態で行われるようになる。

い慣らす」とも可能である。

コミュニケーションは、より誤解の少ない状態で行われるようになる。

コミュニケーションとして、互いに違う意図において同じ接觸をすることが可能だ。逆に言えば他者＝外国人でなければ、自国民同士なら必ず全てを理解できるだろうか？同じ市町村出身なら？家族の成員なら？こうした近い人々同士でもある面においては知らない、理解できない点がある。自己や自己文化（と呼べるものがあるとして）が全てにおいて自明である、といえないように

③ 他者（他人）は「外国人」と同義）は全ての側面において他なるものである。

① でも実際はコミュニケーション可能で、理解がある（ので他者ではない）

② 他者との差異は明白で、理解不可能である

への反論にならない。コミュニケーションの成立は「他者」の否定にはならない。②も③もコミュニケーションや理解が可か不可かのどちらかしかないという考えに囚われている点で同じコインの裏表である。人間同士には「分かる」ともあれば「分からない」ともある」という、ありきたりだが重要な事例によって①②③に反論できる。初めは「分からない」とでも慣れによってコミュニケーションに支障をきたさないようにはやめるし、「理解」によつてある程度は飼

#### B. 心情理解と知識理解はいつも同時に成り立つか

「他者」にまつわる議論に繰り返し登場するのが、「理解」によって「他者」という認識が解消される、という考え方である。「理解」という語は、知る」と=知識「理解」と、共感=心情「理解」という二つの意味を含んでいるが、特に断りがない場合、その双方が相互に成り立つことを前提していると考えられる。

再びスパイロをあげよう。“Anthropological Other or Burmese Brother?”という題名からも予測できるように、彼は“Other”=「他者」は近くて親近性がある」との対極にあり、全く異なる思考を持つよそよそしい人々を指すかのように書いている。

西洋の人類学者にとって、…（略）…少なくとも一つの動機に関して、ビルマ人は「兄弟」（“Brother”）であつて「他者」（“Other”）ではないことを示す。つまりある場合や領域においてビルマ人行為者達は、西洋の行為者同様、合理的で実利的・心理的な利益計算に基づいて行動し、別の場合や領域については、西洋の行為者同様、非合理で感情に基づいた動機によつて行動する。その上これらの動機は、本質的に自覚されてくる（1992：p.xvii）。

ビルマ人は西洋人と同じように、ある時は合理的な利益の探求に

基づいて行動し、ある時は非合理的な感情に基づいて行動する、という指摘はもつともである。だが問題は、それが第一文の「他者」（＝理解できない人々）ではなくて兄弟（＝同類で親しい人々）の根拠にはならないということである。この第一文は次の前提を含んでいる。

⑤ 互いに親しければ、正しく相手を知る」とがである。

これは以下の考え方を反転したものはないだろうか。

④ 無知は偏見を生む。逆に知ることによって、人々は互いに親しくなる。

だが、これもある程度までは当てはまるが、常に真ではないのは明らかである。知っているからこそ嫌う例は実際にはいくらでもある。親しいからこそ相手を厳密に知ろうとしなかつたり、知る事ができない」とも同じく多い。

### 3. あるカーティリー名を「他者」と呼ぶ問題

#### A. 差異の政治学：不平等のため？

近年の「他者」をめぐる議論の中で、例えば読者である（日本語で書いてあれば）「（私たち）日本人」と違う被調査者を「他者」と総称することに対し、以下のような問題が指摘されている。

…（略）…他方で、この「他者」の概念は今日、その根底から搖

るがそれつつある。世界の各地域に余すことなく及んでいる政治・経済・社会・文化的変容のメカニズムは、民族誌家がフィールドで直面する現実から他者性を著しくそぎ落としつつある。今日の民族誌的現実は、ますます「我々」自身が住む現実と何かしら「似た（similar）もの」になってきており、それは「異なる（different）もの」とは可能でも、「他なる（other）もの」つまり「我々」の住む現実とは全く別の現実として語ることは、次第に正当化しにくくなってしまってきているといえる。…（略）…民族誌家が依然として「他者」について語ることは、好むと好まざるとに問わらず、「彼ら」を永遠に「彼ら」の位置に押しとどめておこうとする抑圧的な政治行為となりつつあるのである<sup>(10)</sup>。

以上のような「他者」概念の批判は、人類学に対して、また人類学内部で起きた他者性の構築に対する批判、言いかえれば「他者の他者化」への批判から生まれてきた。「オリエンタリズム<sup>(11)</sup>」以後、「文化を書く<sup>(12)</sup>」、「Time and the Other<sup>(13)</sup>」などが民族誌の操作性、時には虚構性、及び表象の政治性を明らかにした。グプタとファーガソンは、*「他者化の政治学（a politics of otherness）」*は表象の政治学に還元できないところに存在すると指摘し、移民現象の場を例としてあげる。

…（略）…文化的差異が構築され保持されるのがすでに空間的につながりのある(spatially interconnected)世界での権力関係の場

であると認識すれば、移民の制限は権限のない人々

(disempowered) がその状態にどうめぐられるための主な手段であるといふことが見えるようになる。……文化的・空間的な分割を

脱自然化するという人類学的な責務は、この点において、まさに文字どおり『空間的なネイティヴの具体化』(アバデュライ 1988b<sup>(24)</sup>) に抗する政治的責務と結びつく(1997: 46-47)<sup>(25)</sup>。

彼らの主張は、以下のように単純化される危険性をはらんでいる。

⑤ 差異（ここでは「他者性」）は政治的不利益のために作り出されるさらに⑤の逆のテーマ

⑥ 本来、人間の間に差異はなく、作り出されたものである

も相互に成り立つかのよう見える。しかし、不利な差異が作られ、固定化される状況が実際にあっても、差異が常に「他者」化につながり、抑圧と不平等を成立させる要因になるかのよう一般化はできない。ここで非難されている「他者化」は「周縁化」と同じ意味だと考えられるが、「他者化」を行なうのは、政治的に優勢な側だけではないし、政治的な意図だけが作用しているのではない。「周縁化」は様々な「他者化」のなかの一側面に過ぎない。だが最近は特にアメリカで、政治的な正しさの追求のために⑤と⑥を前提とした研究

が増加する傾向にある。結果として「他者」は容易に「他の人々」つまり「社会的少数者」と同一視されがちだ。こうした「他の人々（others）」の「差異」への不寛容が「他者」化の原因と想定されるため、多文化主義や複数アイデンティティの認識がその処方箋とさ

れる。しかし、差異は必ずしも「他者」を生むわけではなく、多様性の提唱によって消え行くものではない。<sup>(26)</sup>

以上で見てきたように、近年はエキゾチックな構築物としての「他者」を脱構築することに熱心なあまり、「他者性」や「差異」を、悪しきものとして避けようとする傾向も出てきている。彼らは調査者—被調査者や多数者—少数者の差異および「他者性」を抹消することによって、両者の政治的不均衡を是正しようとしている。だが、それはかえって調査者・被調査者や多数者—少数者の二分法を強化された中身を同質化したら、残るのはその境界だけなのだ。

この二分法に陥らないためには、「他者」概念を否定するのではなく、いつ・誰が・どんな時に、誰にとって「他者」として現れるのかを再検討する必要がある。同時に、「他者」をめぐる議論の混乱が、実はこの一語の広すぎる意味内容によるものだと認識することも有效である。「他者」・「他なるもの」は「似たもの」になることによって消えゆくものではない<sup>(27)</sup>し、必ずしも解消できるものではない。この論文では構築から逃れるものを「他者性」と考えるからだ。以下で「他者性」と「他者」を再考したい。

## B. 「他者」概念の反撃

他者の他者性をなきものと前提するポストモダン・ポストコロニアルの潮流に対しても、1995年にドイツで行われた学会を基に編纂された“ANTHROPOLOGY AND THE QUESTION OF THE OTHER”

<sup>(2)</sup> "は反語を加へてゐる。クロカムは "There Is No Other"<sup>(3)</sup> や、他者 (the Other) や「何かの差異」、あるいは「他者性」がそのじあふるべく想はれてゐる所などはなまへてゐる。

リリジメタ述語「差異 (difference)」や「浮かび上がるが、これが

まだ根源的他性 (radical alterity) まだ思えな。なぜならあれば

とは他な (other than) (i.e.異なる different) されば、

まだそのトビ離れたトライティを想起してゐるからだ。他

者 (the Other) は理諭のための存在する所ではない。されば「理諭

の内部：筆者註<sup>(4)</sup>には他者はこな。理諭は他者性 (otherness)

を、ただ同一性の中の差異 (difference-within-sameness) され

てしか捉へないのがやめな。 (1998: 18)°

タイラーの "Them Others- Voices without Mirrors"<sup>(5)</sup> で他者と

ついて同様の指摘を行へ。お先述した、「他者」を解消すべくの

心する人々の考えが凝縮した文があげられる。

我々は他者(the other)を解放し、彼らをあるがままにしなければならない。他者の差異を感じ取り、彼らが自分たちの文化から自由の距離を取る」とができるようになるようだ。初めは著しい差

異を感じる。それに対する挑戦は、奇妙で・不慣れで

(strangeness) を我々の人生の一部と置き換え、差異を理解可能なものにしていくとだ。我々に親しみのあるものと関係づけて

みると、言葉にしめてある (given a linguistic shape) それは恐ろしくて当惑するよくなものではなくなる。努力 (struggle) は限られた視野からの解放に対してもなく、他者をもがめぬいしなべくみゆく (englobe) がやめぬよくなむよく広く理解に對してなれねる。<sup>(6)</sup>

次に、上記の考え方と対照的な以下の文章が対置される。

最悪なのは理解である。センチメンタルで無意味だ。眞の知識とは、おもしに他者に関して決して理解できないことであり、その知識とは他者について、他者をある一人の人間足らしめな。やのである (what is in the other that makes the other not oneself)。それは私たちによひトライティや差異として定義されといふものだ。<sup>(7)</sup>

そして前者の考えは「他者」の価値を、その存在そのものにおいてではなく、主体の客体としてしか認めないとだと批判する。後者の「他者」は、主体のためではなく、ただ、存在してゐるのだ。タイラーによれば、我々は「特定の他者：the other」について何かを語つゝとは出来な。

なぜなら他者 (other) は特定の、そして統一性を持ったものではないからだ。それは根絶できない複数の特異性であり、them

others<sup>他人</sup> (It is ineradicably a plurality of singularities - them others)。我々は彼ら(the others)を理論化(thematize)、彼らの言葉を語ることは出来ないが、彼らに関する我々の語りを、語るには可能である。彼らについての我々の語りを理論化する、いふは出来るし、その理論化について語りこなす出来る (Taylor, 1998: 32)。

クロウエルとタイラーが共通して語るところのは要約されることは次のようになる。

⑦ 他者 (other) について事前に何かを語らなければ、全てを知ることも出来ない。他者の根源的他性は現実の他者に会うとによってしか出会えない。他者は特定できるものではなく、ゆえに、差異やアイデンティティを持つたものと云うわけではない。他者は事前に予測不可能な、そして理解しがたい残余である。

この他者について厳密な「定義」をしてしまった意味がない。そのような論理による特定化を逃れるものが、彼らの「他者」だからだ。⑦は、「見ると」、「他者」の「他者性」を構築し、固定化した「他者の他者化」と同じような発想に見えるかもしれないが、実は全く異なる。「他者の他者化」を行った人類学者は、ある人々を「他者」として対象化し、彼らにあるはずと想定した「他者性」を見

つけた。人類学者が由いの「他者」として、自分の姿を鏡に映して反対に映った姿・鏡像（逆像）を描いていただけではないか、という疑問がなされるようになつたのは<sup>(2)</sup>、あらかじめ「我々とは異なる他者」を発見する事が対象と出会いより前に決まっていたからだ。これに対しタイラー達は、他者はそのように特定化して予測できないものを探すとする。つまり⑦の他者 (other) とは「他者性」によつて初めて現れる「他者」のことを指していると言える。しかしのままでは同じことを表現してみると聞こえてしまつので次節で様々なものを指すotherを、別の語で言い換える。

逆に「他者の他者化」を批判したいわゆる「ポストモダン人類学」は、論理的にテキストや概念の脱構築を行つた。「他者性」の概念はifikションとされ、対話や認識の変化によつて解消できるはずのものと考えられた。だが、クロウエルはそこには「他者」がいない、ところ。

多分驚くのではないかもしないが、私はの (radical alterity=根源的他性：引用者注) 起源を他の人間 (another human being) のより他者 (the Other) との出合いに位置づける。これが意味するのは、根源的他性は「三人称」的な探求の形態（或いは理論）のコンテキストには表れない」ということである。そりには他者がいないのだ。我々が社会性の「一人称的」な側面に關して哲學的考察を行つても、もし認識論的・解釈学的な事柄のみに焦点をあわせ続けていれば、根源的他性の兆候は現れない。

根源的他性の観念は、他者 (the Other) との倫理的出会いの轉郭

(概念) に表れるのだ。<sup>(Crowell 1998, 13-14)</sup>

クロウエル・タイラーは、哲學的な思索だけでは、他者のradical alterity: 「根源的他性<sup>(註)</sup>」にはけつして巡り合えず、実際の人間である「他者」と出会う」とによつてしか見出せないとする。彼らの視点では、文化的・非時間的な他者をエキゾチックに構築した人類学者も、他者性が本来ないと前提する人類学者も、どちらもその予想からはみ出たりずれてくる部分をとらえず、「他者性」の内容を自己の姿から類推する点でまだまだ同じコインの裏表なのである。

### C. 「他人」と「他者」

「他者」には予想不可能な部分と、知つても理解不可能な点がある、といふ考えは説得力があり、実際の事例分析にも有効である。だが一番問題なのは、「他者」といふ語が何を指すかが分かりにくいためである。Otherといふ語が複数のものを指すためだ。今までの論文で挙げた英語のthe other, Other, the Otherだけでも、それぞれが様々な「他者」をバラバラに指していた。大文字のOtherを「我々西洋人」にとって理解不可能なよやよしゃ人々の総称のように用いてゐるものもあれば（スペイロ）、「the Other」を実際の人間として書くものもある（クロウエル）。箭内はotherを「[我々]の住む現実とは全く別の現実」として「[他なるもの]として[いる]し、タイラーはotherをthe other=特定の誰か、ではない、とし

てゐる。他者には「他者性」があるといわれるが、「れもotherness, alterity, radical alterity」などといったいくつかのバリエーションがある。「他者」が「現実にいる（自分以外の）人間」であれ「自文化以外の人間」であれ、具体的にいついた時に、どの程度「他者」なのか、とこいつことを表現できなければ、人類学的事例を考察するには不十分である。この論文ではその条件自体に問題があるのでなく、「他者」という語が異なる対象を表すことによって混乱が起きていくと考え、別の語による言い換えによつて整理したい。

まことに、「他者」にまつわる言いまわしのいくつかを否定しておく。「自」以外は全て他者である、といふ哲学やポストモダン人類学に見られがちな前提是、人類学的な事例の分析に適さないため、除外する。ポストモダン人類学者はいの「他者」観を否定しようとしながらも、それを強化してしまう。西洋（WEST）以外（REST）をすべて他者「OTHER」と表象するのも、同様である<sup>(註)</sup>。非西洋人の我々はの表現を使えないし、その誤りにも気づかざるを得ない。それに「マイノリティ」や「他国籍・他民族の、ある——人や一族」をその条件だけで分析者が「他者」と表現するのも無用な混乱を招く。箭内の言うような政治性があるだけではない。「他者」との線引きは日常生活の中で、普通に行われている。ところが、それをある民族名や国籍名と一致させて表現してしまつ」とじよつて、その線引きの可変性が見えにくく、また表象しにくくなつてしまつからだ。例えば「在日朝鮮人」「日系アメリカ人」に関する語文では以下のように「他者」が用いられている。

「彼ら（引用者注：在日朝鮮人）は日本人が自分とは違った目で見ていると感じる」とにより、日本人が自分とは違った人間であると思つたりしない。彼らは、自分たちが彼らと違う、自分たちの方が異邦人であると思つのである。彼らは、日本人の目で他者である自分を見ているのである。」（1996:248）<sup>(26)</sup>

「日系人」の「人種」と「他者」境界の変容について、少し長くなるが引用しよう。

「[人種]概念が最も明瞭に表出するのは、他者を排除する時なのである。しかしこれはその境界が変化しない」とを意味するのではない。…（略）…境界はきわめて恣意的に変化する。「他者化」された者の成員性は人種の境界を超えることはできないが、要は、誰を「他者」とするか、誰を排除する対象とおくかであり、その関係によつて境界は変わりうる。」（1996:266-267）

「[ハクジン]はモデルでありかつ他者化された抑圧者の意味を持つが、それに加えて三世の日々の実生活における白人アメリカ人との接触や交友関係は、他者ではない、自分を取り巻く身近な存在である。他の三世から「完全にアメリカ人化している」と評される三世でも、白人アメリカ人の親友を持ち、人生のパートナーとなつてゐる一方で、「ハクジン」の人種差別主義を痛烈に批判し嫌悪する。彼らにとって行動的側面や構造的側面における主流社会への同化と自らのエスニック・アイデンティティは必ずしも同次元にはない。他者としての「ハクジン」と他者ではない白人が共存しているのである。」（1996:282-283）

「他者は白人人種差別主義に象徴される「ハクジン」であり、必ずしも白人そのものを他者化してはいない」（1996:284）

そして「アジア系アメリカ人アイデンティティ」が生まれる」とによつて

「中国系の例に象徴されるように、かつて他者であったものがある次元の[自己]の境界の内側に同居する存在となつた」（1996:285）<sup>(27)</sup>

上記の例が示すように、あるエスニックグループ：「——人」は、「他者」として現れる時もあれば、そうでない時もある。」のように指摘することとは重要だ。問題は時に、分析者が単なる「ある人々」を表す語としても「他者」という語を使うことである。」の場合、それが単なる「ある人々」「他の人々」を表していても、そこには何か「他なるもの」「他者性」があらかじめあるかのように聞こえてしまふのだ。ある人々にとって、別の人々に「他者性」があるとそれでいる場合に限つて分析用語として「他者」を用いるために、「他人」という日常語をここで導入したい。本稿で「他人」は、単に「他の人」という意味で用いる。「赤の他人」と言う時の意味は含まない。上記の例を使えば、「他者ではない白人」や「白人そのもの」は、ただの「他人」なのだ。在日朝鮮人の子供は、自分が朝鮮人だと知られる」とつて、それまで単なる他人同士の関係だった日本人に対し、自分を彼らの「他者」として感じるようになる。アメリカの日系人にとって、中国系（アメリカ人）が[自己]の境界の内側になつたという時、彼らは「[自己]」になるわけなく、「他者」との境界によ

つて現れる「われわれ」側の中の「他人」になる。竹沢のように「他者化」が必ず排除につながるとは言えないと思うが、「他者」の境界は可変的であり、境界は誰を他者として意識するかによって決まるとは言ってよいだろう。私の言葉で言えば、他者性が現れる」とによつて、他人を他者とする境界が現れるのだ。「他者」をこう定義しよう。

⑧ 「他者」は「他者性」の現われ(認識)によつて初めて想像される抽象化された「彼ら」他人の集合である。「われわれ」は他者との対比によつて想像される。他者性とは彼らを「われわれ」として含め得ないものとして想像させる予測不可能な、あるいは理解しがたい残余である。

これは他の人間である「(another human being =) other」と、既存の概念や予測をすり抜けていく「残余」とのother」の言い換えである。

「(another human being =) other」 = 「他人」

「残余のother」 = 「他者性」「他なるもの」

と置きかえれば、前者が必ず後者を意味してしまうかのように聞くえるクロウエルらの議論を、より厳密に表現できる。「他人」の集団が必ず「他者」として表れるわけではない。他人は、「他者性」によって「他者」として想像されるのである。「他者性」が個人の特異性として限定されれば、それはその個人の性質としてだけ理解される。

だが「他者性」がある人々に共有されるものと考えられ、「他人」がその一部として想像される時、彼・彼女は「他者」と見なされる。⑧によつて現れる他者との境界(他者境界)は、その時の視点やテーマによつて現れるものが異なる。通常一度に一つの境界しか行為者に意識されず、その境界に基づいて他者が語られる。他者境界は可変的である。ある一つの境界も固定的ではなく、消滅する可能性もある。境界は名があるもの、ないものもある。既存の名のあるカテゴリー間の境界と他者との境界は必ずしも一致しない。だが、既存の名のあるカテゴリー間が他者境界として意識されることもあれば、他者境界がしばしば語られ、名づけられることによつて、固定化されることもある。すると、ある異なるカテゴリーの人々が他者性を持ったものとして本質主義化される。ここに一方的な権力関係が絡む時に「オリエンタリズム」的な他者構築が起ころる。他人が他者として認識され、語られ、固定化されるのは、以上のような複雑なプロセスを経た後である。にも関わらず、「他者性」の認識を、権力を持った表象する側が、被表象者(=被植民者)を「他者」化する政治学だとして非難しても、すべてが同じ物語に回収され、既存のテクストの言説を強化するだけで終わってしまう<sup>(28)</sup>。「被植民者たちを表象=代弁すること・人類学の対話者」で、サイードが行イードが指摘したように、生々しい現象を捨象して既存の類型やカテゴリに還元しないためには、他人に出会い、人類学者・表象者をも含めた人々が、誰を・いつ・どんな場合に他者と見なすのかに

ついての言説を注意深く追い、常に既存の枠組みや論理を逃れていく「他者性」「他なるもの」をとらえるプロセスを放棄しないことが必要である。

### 3. 「他者」と移民研究

移民研究は人類学の見直しによって盛んになった。ここでは「他者」概念と移民研究の問題設定について考察したい。

「移民」「エスニシティ」「在日外国人」「ディアスボラ」「出稼ぎ労働者」「定住外国人」「難民」…移民を表す言葉は様々にある。しかも、それぞれの語が異なる「意味」を持つている。この論文で注意を促したいのは、上記の語が「他の人々」を示す言葉、つまり「われわれとは違う」ことをもとにつくられた「他者」を表す言葉群だということである。それは「われわれ」から「名づけ」られたものであり、「意味」も名づけた側によって付加されたものだ。それが正しいか否かは問題ではない。問題は、「われわれ」との関係を示したはずのこの語群が、彼らの属性であるかのような印象を与えるがちなことだ。しかもそれが「他者」カテゴリーであるにも関わらず、彼らが名乗つた「われわれ」カテゴリーであるかのように「われわれ」は想像しがちだ。

また注意しなくてはいけないのは、「名」のある集団に對して個々人の帰属意識（例・「私はペトナム人」）や、共通性があつたとしても（例・在日ビルマ人のほとんどが高学歴）、それが必ずしも「われ

われ」としてのアイデンティティを意味するわけではないということだ。語る相手が他の名を持つ集団である時、彼らは「われわれ」としてその集団名を名乗るかもしれない。だが、それは集合的アイデンティティを示したことにはならない。移民「内部」でのまとまりのなさが「分裂」や「争い」に見えるのは、初めから無いところに集合的アイデンティティを、見る側が想定していることによる可能性が大きい。「移民」にまつわる語が常に他者カテゴリーでしかなく、常に自他の区別はカテゴリーと一致しない、というのではない。自他の区別の重要性や名の重要性が、個々の事例によつて異なることと自体が考察の対象とされるべきなのである。

カテゴリーは便宜上、研究対象を定め、一定の傾向を探る上で必要なものである。だがカテゴリー化は一つの名のもとに、内部の差異を忘却することによって行われる。移民研究が常に人類学者に考察を要求するのは、名がない境界、現れては消える境界、カテゴリー定義からはみ出してしまうものの存在である。彼ら自身には重要な「名づけ」られたカテゴリーが一人歩きしたり、「名乗り」などを見落とさない様にしなければいけない。その説明に新たな名づけ（カテゴリー化）をすることも時には必要だが、この名づけも何かを忘却することによって行われる。人類学は、研究対象を限定しながらも、そこに收まりきらないものをもとらえようとするために、カテゴリー化とカテゴリーの疑問視を絶えず繰り返すことを余儀なくされる。

- (1) もともとビルマ語では「シルマ」(口語)・「ミャンマー」(文語)もとに同じ意味で使われていた。が、前年に民主化運動を武力弾圧した軍事政権(SLORC)が1989年に対外国名を変更したため、反政府側を中心に「ミャンマー」の使用に反対する者も少なくない。ビルマ・ミャンマー研究者の間でもじめいを使用すべきかに關しては意見が分かれる。在日ミャンマー国籍人の大多数は、日本語でも「ミャンマー」を使用している。だが私のフィールドワークのキーンウォーマントが「シルマ」を使用していたのでも、ソリッドは一般的な総称として「シルマ」を用いる。
- (2) Tamura, Katsumi "Intimate Relationships in Burma" The Centre for East Asian Cultural Studies Vol. XXII 1993 pp.11-36 田本勝「人との繋がり」『トムトム読本：シルマ』河出書房新社、1997年 pp.120-126シルマ本国における「親しき」(キン)」関係の重要性があげられてる。「親しき」関係は一個人同士の間で結ばれる個人的「者」関係であり、「グループ」としての関係ではない。
- (3) ビルマ人がグループ内やグループ間の統一を欠くことは、しばしば指摘される。ソリッドは線引きは、必ずしも統一性の欠如や競争の同じ意味ではなくが、それとの関連を類推せると十分なほどである。民主化運動における学生団体や政党の多数乱立・内部分裂に関してはアウンサンスー「アウンサンスー演説集」みやや書房1996年、Lintner, Bertil. *Outrage: Struggle for Democracy, Review Publishing 1989*、伊野憲治「ミャンマー」「民主化」運動における民衆行動の諸特徴』『北九州大学法政論集』第一卷第一号1993年、藤田晶弘『誰も知らないミルマ』文部春秋、1989年、など。主な理由に挙げられるのは、個人的確執、
- (4) 例えば、太田好信『トマハベゼンバハノの思想：文化人類学の再想像』世界思想社、1998年
- (5) 渡本清「文化相対主義の代替」『興味』1985年8月No.627 pp.105-121 もの「差異のよみえかた：相対主義と普遍主義」『東波講座文化人類学』第12卷『思想文化の再評議』1996年 pp.69-96を参照。
- (6) Sperber D. "Apparently Irrational Beliefs" in *Rationality and Relativism*, M. Hollis and S. Lukes, eds., 149-180, Cambridge, MA: MIT Press, 1982.
- (7) ibid. Sperber D. 1982, p.157
- (8) Gellner, E. "General Introduction: Relativism and Universals," in *Universals of Human Thought*, B. Lloyd and J. Gay, eds., 1-20. Cambridge: Cambridge University Press, 1981, p.5
- (9) Spiro, Melford. *Anthropological Other or Burmese Brother?: Studies in Cultural Analysis*. New Brunswick: Transaction Publishers, 1992
- (10) 篠田義「他民族のなかの『似たぬの』＜：未来の民族誌＞」『民族誌』1994年、59/2 pp.170-171
- (11) キャラム・ヒュース『オーバハタコバ』上・下、平凡社、1993年

- (12) クラーフィー・マーカス編；春田直樹〔せき〕訳。紀伊國屋書店  
1996年、初版翻訳
- (13) Johannes Fabian, *Time and the Other*, Columbia University Press, 1983
- (14) Appadurai, Arjun. 1998 "Putting Hierarchy in Its Place." *Cultural Anthropology* 3(1): 36-39
- (15) Gupta and Ferguson 1997 "Beyond 'Culture': Space, Identity, and the Politics of Difference" in *Culture, Power, Place*. Durham, Duke University Press 1997, pp.33-51
- (16) Spinoza and Dreyfus "Two Kinds of Antessentialism and Their Consequences" *Critical Inquiry* 22 Summer 1996; 735-63
- ※参考文献の整理によるやうな記述
- Tim Dean "Two Kinds of Other and Their Consequences" *Critical Inquiry* 23 Summer pp.910-920
- トマス・デーン「他者 (Other)」を別集やカト・コーン、精神分析学の立場から「他者 (Other)」を別集やカト・コーン、具体的には性的・社会的少数民族 (social and sexual minorities) における「他の人々 (others)」との間に潜む偏見や「他者化 (marginalization)」だが、この意味で「他者 (the Other)」を用ひる、カト・コーン・類似 (相違) の定義・自他の区別などに取扱ひたる (other Others) を既述するにこなしておいためである (p.912)。本稿は後述の同様の主張を異なる側面から展開する。
- (17) 篇内は「他ならぬ」を單に「異なる」ひと達へとしろ。だが、人々が「他ならぬ」ことなくして「他ならぬ」ではない、しかしむしろ「他ならぬ」ことなくして「非常に異なる」人々…といった差異の大それらしい考え方をもつて取れる。
- (18) PAIDEUMA (44):1998 Frobenius-Institut E.V., Franz Steiner Verlag/ Stuttgart, 1998
- (19) Crowell, Steven. "There Is No Other: Notes on the Logical Place of a Concept" PAIDEUMA (44):1998 Frobenius-Institut E.V., Franz Steiner Verlag/ Stuttgart, 1998:13-29
- (20) Taylor, Stephen. "Them Others- Voices without Mirrors" PAIDEUMA (44):1998, pp.31-50
- (21) qtd. in Taylor, Taylor, C. 1990 "Comparison, History, Truth" in *Myth and Philosophy*, F.E. Reynolds and D. Trang (eds.) Albany, New York: SUNY, pp.41-42
- (22) qtd. in Taylor Baudrillard, J. 1993 *The Transparency of Evil*, London: Verso (Baudrillard:1993: 148)
- (23) 今井良司「人類学の認識論的諸問題」『現代民族誌』1998年6月号pp. 60-67
- (24) じの體やでは「他者化」の回収され、云々では「他者化」のみ使用される
- (25) 同上、Bowman, Glenn "Identifying versus identifying with 'the Other': Reflections on the siting of the subject in anthropological discourse" in *After Writing Culture: epistemology and praxis in contemporary anthropology*/ eds. James A., Hickey, J., and Dawson J. 1997 London Routledge pp.34-50
- (26) 森本ヨウ子「在日朝鮮人：在日朝鮮人のアバウト・ハティティの認識」岩波講座文化人類学第7巻「移動の民族誌」青木保他編1996

の體やの立場では、「他ならぬ」 = 「他者化」とは類似や別集の範疇に属するのではなく、別の立場で裏切られる。事後

pp.233-262

- (27) 竹沢泰子「『田人』と『黒人』の間で：日系アメリカ人の自己」他  
著】画書pp.263-292

- (28) サイード、ハーヴィー『現代思想』1998年6月号、pp.72-91

# **Who is the "Other"?: Rethinking and redefining the "other" through immigrant studies and philosophy**

Sachiko TANUMA

The idea and construction of the "other" has been criticized in Anthropology.

It came to the point where some anthropologists would argue that otherness is the result of power relations and that we must denaturalize and deconstruct otherness. This paper reexamines what such anthropologists think about the "other" and "otherness" and calls their premises into question.

There are also recent critiques from some philosophers toward postmodernism which argue that "there is no other" in postmodernist studies. Using their idea of the "other" and examining the usage of the term the "other" in recent immigrant studies in Japan, I will redefine this term using the colloquial Japanese term "*tanin*," which simply means "another human being." This enables us to use "*tasha*" as a term for social analysis. The word "*tasha*" itself has an unfamiliar, abstract nuance. Confusion arises when people use this term to mean anyone but "oneself," people other than "us," people who are marginalized, people who are studied, and so on. This paper suggests using the word "*tasha*" only when there is otherness felt and mentioned towards others by someone. The boundary of otherness between other and self is seen only from one place and time. Seen from different point of views and occasions, different boundaries will be perceived by the same person. Such differentiation cannot be reduced to mere political strategies. Rather, the "politics of otherness" is just one aspect of a complex process by which we perceive an "other."

## **Key words**

the other, "Other," "migrant," boundary, named or not